

11 教員組織

進捗状況報告

		公開/非公開	全学的な視点	個別的な視点	単位	2005	2006	2007	2008	備考	
○施策の目標の達成度を測る指標											
指標1	専任教員1人あたりの学生数（ST比）	公開	×	○	人	23.5	22.8	24.6	27.4		
○基礎的な状況を継続的に観測する指標											
指標2	必修科目および選択必修科目に対する専任比率	専門教育	公開	×	○	%	95.7	96.1	97.0	96.8	
		教養教育	公開	×	○	%	100.0	95.4	94.5	92.2	
指標3	専任教員一人あたりの授業時間数	公開	×	○	時間	→	→	→	→	大学基礎データ表22参照	
指標4	専任教員の年齢別構成（分布）	公開	○	○	→	→	→	→	→	大学基礎データ表21参照	
指標5	教員組織における女性教員の比率	公開	○	○	%	3.4	3.4	5.1	5.3		
指標6	教学補佐、実験実習補佐・教務補佐、授業補佐の採用数	教学補佐	公開	×	○	人	118	118	186	190	他に、 (2005、2006年度) 教育技術主事8、実験助手1、 契約助手3 (2007年度) 教育技術主事7、実験助手1 契約助手4 (2008年度) 教育技術主事5、実験助手1 契約助手4
		実験実習指導補佐・教務補佐	公開	×	○	人	3	3	3	2	
		授業補佐	公開	×	○	人	0	0	0	0	
指標7	本学出身の専任教員の構成比率	公開	×	○	%	16.9	16.9	15.3	14.0		

注)全学的な視点、個別的な視点について
 全学的な視点とは学長室の進捗状況報告シートに表示される項目
 個別的な視点とは各学部の進捗状況報告シートに表示される項目

2007年度の進捗状況報告と状況は、基本的に変っていない。授業以外の負担の増大は、学部規模の増大にともなって役職をもった一部教員に特に集中する傾向があり、今後効率のよい学部運営組織を構築していく必要がある。人事関係で2008年度から変更されたこととして、実験科目の補助業務従事者として新たに教育技術職掌が職員系列として導入（2008年度1名採用）され、教育面に力点を置いた人員構成となったことが挙げられる。

学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

「理工学研究科で先端的研究機関の研究者を国内客員教員として採用（理工学研究科「11.教員組織」参照）しており、学部生にもよい刺激となっている。

学内第三者評価

認証評価では「レベルの高い優秀な教員を揃えており、そうした人材の確保のために特別な努力がなされていることをうかがわせる。昇任人事は教育・研究業績を勘案して行われている」と高い評価を受け、高い専任比率についても本学部の特長として評価できる。それとは裏腹に、専任教員の担当コマ数が多く、教育負担の軽減が課題であるものの十分に進捗していない。加えて授業以外の負担の増大が特定の教員に集中することも課題である。

2003年に設定した目標にある「学外の教育研究機関との人的交流の促進」についての記述が求められる。

なお、学外委員からは以下の意見があった。
 専任教員の担当時間数が全学部の中で最も多くなっており、注意を要する。